

勝林寺寺報

あるお寺の若い奥さんのお話を聞いてみて
ください。
もんほうう

この奥さんは、法話を聞く「聞法」という習慣にさほど深いなじみもないまゝ、このお寺にお嫁にきました。

まず、耳の遠い老婦人がお寺の演壇の前に
すわって、一心に聴聞していい姿です。なんでも
この老婦人は、八十の半を越えて、だれ
の手もかりずに一人でお寺参りできるほどお
元気でしたが、耳だけが遠くなり、日常の会話
では、耳もとで大声をあげてもなかなか通じにく
い状態なのです。それなのに、法話を聞きな
がらしきりにうなずいています。
そこで、疑問に思つた通りを、夫の父である
住職にたずねました。

はじめのうち、その答えに納得できませんで
した。はぐらかされた、と思つたそうです。
ところが、四、五年してようやく本当の意味
が理解できるようになつたと言います。このわ
けについては、ひとまず後にゆづります。

もう一つは、住職やよそからお招きした布教使さんの法話に、同じ話題が何度も登場するところです。このお話はいつか聞いたことがあるなとひどく気になりました。なにしろ、結婚したばかりの若い世代です。法話をしている人がなまけていいるからではないか、ときえ思つたそうです。さすがに「なまけていいる」という言葉は、口に出来ませんでした。ところが、この疑問もやがてわかるようになります。耳の遠い老婦人

暮坂一月十七日 詞儀

それまで若奥さんは、自分の生き方に迷っていました。特にこれといった疑問ももたなかつたそうですが、社会的に見て、自分はそれほど間違つていないと確信していました。それが、聞法によつて仏に照らされてみると、いかに自分がおそまつな間であつたかということが、次第に見えてきたのです。だから、何度も同じ話を聞いても、その都若奥さん自身のこととして感動し、みずみずく新鮮なものとして受けとめられるようになつたのです。

学校での講義や著名人にによる一般的な講演会などには見られぬ世界です。

お寺の若い奥さんにその違いがわかつたのは、奥さん自身、真剣に聞法するところが身についてからです。お話をいちいちが、あれも私のこと、これも私のことだつたと、うなずけるようになつたからです。

が無心に聴聞していた姿が理解できたのと、ほ
同時にで、同じ理由によるものでした。

それは、法話を聞くというのは、決してめず
らしい話題を、耳で音声として聞いているのでは
ない。ということです。

音声を聞くのなら、耳の遠い老婦人には不可
です。めずらしい話題というなら一度聞いた話
もう必要ではありません。それなのに現実に、
わば「理屈に合わぬ」ことを、みんな当然のこ
として満足して聞いているのです。

昭和六十三年度
勝林寺仏教青年会
理事総会
二月二十一日（日）
午前 午後 理事会
後日ご案内いたします。
仏青年会長 平野

人れがの たし 度の 法人い つた

昭和六十三年度
代議員会

二月十四日(日)
午前九時半

「勝林寺寺報」(臨時号)で当日の議案をご相談のうえ代議員会に出席ください。

代議員様

(「淨土真宗の寺が身近になる」より)

が、百人なら百人が、みんなそれぞれ、お話を聞きながら自分のこととして、自分の人生と対話ををしているのです。同じ話をいつしょに聞きながらも、それぞれの人生にあてはめて共感しつゝ、感動をもつて聞いておられたのでした。

いままで気づかなかつた自分を知つたとき、そういう見にくい心の私をこそ、すぐわざにはおれないといふ、弥陀如来の呼びかけに、思わずお念佛のこぼれ出てくる生活が、いとなまれてきたのです。

心で聞く「聞法」には、たとえおばあさんの耳が遠くなつたとしても、少しも不都合はないのです。

二月のこよみ

A black and white line drawing of a slender stem with several clusters of small, round flowers or buds at the tips of its branches.

（小田 薩藤ゆかり）
この度は、私の成人のお祝いに、お
経の本をいただきまして大変ありがとうございました。
『歎異抄』は文学史にも必ず出てくる有名なもので一度読んでみたい
とずつと思つておりました。楽しみ
に読ませていただきます。
どうもありがとうございました。

ダーナの日

二月の第二日曜日は「ダーナ」の日です。



昭和四十年の五月、ニューヨークで行なわれた世界佛教婦人大会で、私たちの代表者がはじめてこの日を申し合いました。

「ダーナ」というのは、むずかしい言葉でいうと「布施（ふせ）」、ひらく言うと「ほどこし」「めぐみ」ということになります。

仏道修行のうえでいちばん大切なところであるこの「ほどこし」。そのところからのはどこしきみんなでしようではないかと申し合したのがこのダーナの日です。

しかし、「ほどこし」「めぐむ」とは、そんなに簡単なことではありません。

仏教では「三輪清浄」（サンリンショウジヨウ）といつて布施をする場合、だれか・だれに・なにを施したかというへとらわれから離れなければ本当のはどこしにはならないと教えています。私が・あの人へ・これを施したといいへとらわれは、しょせん、恩を充つたり自慢のタ不にする浅間い結果に落ち入つてしまふのがオチです。

「仏法ニハ、マイラセゴコロワロシ・コレヲシテ御心ニカナワント思ウコロナリ」（仏法においては、これをあの人にしてあげるのだという心が一番のさまでです。というのは、そんない人は、これをしてあげて、それで人からよく見てもらおうという下心がどうしてもたらくからです）・達如上人はいつもいましめられたそうです。

悲しいことはあります。が私たち凡夫のほどこしは、とらわれから離れた美しい清浄なほどこしにはならないことを、私たちは先ず知らなければなりませんまい。



湯口明弘くん

梗見の湯口時男・真由美さんの間に六二年九月八日に誕生。祖父長一さんご夫婦とお参りしました。



坂本初音ちゃん

六二年十一月十日坪口の坂本智・真己子さんの家に誕生。祖父滋さんご夫婦と初参式。



亀井勇希くん

出石川原の雅仁・あおいご夫婦の長男。昨年十月二一日生。祖父孝氏夫妻に伴われて初参式。

みんなで 念じます。
お念仏にかかる 家庭のなかで
元気に 美しく 育つよう

今年のお正月は ほんとに おめでたい 正月でした。

元旦早々 三人の赤ちゃんの
「初参式」がありました。
おめでとう

どんなに逃げても 目をふさいでも
老と死は必ずだれにも すぐにやつてくる
生死を超える道をもとめよう

昭和六十六年に四百回忌をおむかえする
顕如上人の時代

群雄互に相争う禍中にまき込まれて吉崎の本願寺は焼失・難を逃れて大阪の地に移つた本願寺は、その石山に堂宇を建て門前町をつくりました。（大阪市の始まりです）。こゝが石山本願寺です。全国からご門徒が参集して、またく間に念佛門徒の拠点都市が出来あがつてしまい、織田信長に対抗する戦国大名たちの拠点ともなつていきました。これが十一年間、武田氏などを次々に倒して京にのぼつきましたが、近畿各地の門徒や武士たちは石山本願寺に拠つてこれとあくまで戦いました。これが十一年間、信長は武田氏などを次々に倒して京にのぼつきましたが、近畿各地の門徒や武士たちは石山本願寺に拠つてこれとあくまで戦いました。これが十一年間、信長の前に立ちはだかつてお念佛と平和をまもるこの合戦に但馬から多くの民衆がかけつけました。これが十一年間、信長がかけつけました。このとき石山本願寺のご門主は、若い戦い十一年、あまりにも大きい犠牲を蒙る講和を結んで石山を出た本願寺は、「さぎの森」・「貝塚」・「天満」と転々し、ついに豊臣秀吉の寄進した今の大名たちの拠点ともなつた翌年、新たな念佛道場の堂宇が建立された翌年、「顕如上人」は五十歳で亡くなられました。

一つのほどこしもまともに出来ないこの私が、実は如来さまの大いなるほどこしのなかに住まわせていただいているのです。私たちのうえに、もし清浄なほどこしがあるとしたならば、それは、如来さまが「たとえもろもの毒のなかにわが身をおいても」と、すべての願と力とを、この私のそよぎ施こしてくださる、そのほどこしがあるばかりであります。

「顕如上人御一代聞書」

達如さまのことばをもう一度いたどいてみましょ

仏法ニハ、マイラセゴコロワロシ・コレヲシテ御心ニカナワント思ウコロナリ・仏法ノウエハ何事モ報謝ト存スベキナリ

| 使用材料 | |
|------------|-------|
| こんにゃく | 1枚 |
| だし | ひたひた |
| けずり節 | 1/2カブ |
| しょうゆ | 大さじ2 |
| 赤とうがらし | 少々 |
| *所要時間 約15分 | |

